

吸血男

俺は普通のレスラーだった。

しかし、ある時を境にレスラー吸血男となったのだ。

きっかけは単純だった。試合中に相手のレスラーが額から大量の血を流したのだ。

その時、体に異変が起きた。

妙に興奮しているのだ。

その理由に気づくのに時間はかからなかった。血だ、体が本能が相手から嘔き出る血を求めていた。理性が飛び気がついた時には、相手の首元に噛みついて血を啜っていた。

それ以来、リング名をコウタから吸血男に改名した。

新たなレスラーの誕生だ。

吸血男は、強かった。

吸血鬼として目覚めたことで、超人的力を手にしたのだ。

今までは、前座として試合に出させて貰えるぐらいだったが、吸血男としてブレイクしてからは、メインとして試合に出ることが当たり前になっていった……。

「本日のメイン戦は、突如現れ次々と脅威的な力でレスラー達を倒しプロレス界に旋風を巻き起こす吸血男が、巨人ビックショールと戦います」
カッシー！

「今、ゴングがなりました。試合開始です」

今日は、いつもみたいに簡単にはいかないな。吸血男は思った。

なんせ相手は、身長213センチ・体重200キログラムで世界最大のアスリートの異名を持つ強敵だ。

「両者見合ったまま動きません。先に動くのは果たして……！」

動いたのは、ビックショールだ。世界最大の巨体が吸血男に迫ります。

ラリアットだ！ これは強烈、吸血男の体がロウプまで飛ばされます。

そして、ロウプに弾かれ戻って来たところに、またしても必殺のラリアット。

吸血男、マットに崩れ落ちます。すかさず巨人はカバーに入ります」

1……クツ慎重になりすぎた。さすが巨人だ！ こっちが慎重なことを読むやいなやいつきに勝負してきやがった。2……負けるかよ。ス

「吸血男あわやスリーカウントの所で巨人のカバーから逃れました。

しかし、ダメージはかなりのもの足元がおぼつかない様子です。

そこえビックショールパンチをあびせます。

パンチパンチパンチだー！ 吸血男も手を出しますが打ち合いでは勝ち目がありません。
いや、打ち合いから吸血男が抜け出した」

くらえ

バシッ！

「巨人の足に強烈なケリをあびせたー。これはたまたまらずマットに膝が崩れ落ちます。

そこえ、距離をとった吸血男のスピーアー！」

決めてやる。

「おおトッププロップに上ります。突進によって倒れているビックシヨーに、

出た！エアバンパイアだあー。大の字で巨人の上に飛び降りたー。」

グハッ

「なななんと！すばやく起き上がった巨人が飛びかかる吸血男の首を片腕で掴みました。

その腕の上にあげて吸血男をマットに勢いよく叩きつけたー！」

ドシシッ！

「チョウクスラムだー！ これは、勝負が決まってしまうかー」

やばい、これは効いた。

「ビックシヨー、カバーに入ります」

1……2……

「これでもダメか、吸血男カバーを返しました。

これには、巨人くやしさが顔に出ます。さすが吸血鬼の力を持つ男です。その超人的なパワーがなければカバーを返すのは、不可能だったでしょう」

「ウオー」

「くやしがる巨人のスキについて巨人の首に噛みつきました。ブラットドレインです。

そして、すばやく離れます。審判の目を盗み鮮やかに決めました。これでは、ビックシヨー抗議しますが、反則にはなりません」

よし、これでイける。

「血を吸ったからでしょうか、吸血男の動きが少し良くなりました。反対に巨人、貧血を起こしているのでしょうか足がふらつきます。恐ろしい技を持っています、吸血男」

「さあーこれはすごいことになりました。20分近くもういきづまる攻防戦が行われています。技を決められては起き上がり、決めては立ち上がり、本当に見ごたえのある試合になりました」
クソ、どうやったら倒せるんだ。吸血鬼でもなくせに、なんてタフなんだ。

「この二人の怪物の戦いに果たして決着はあるのでしょうか。」

ドゥ！

「ビックシヨーの巨大な足が、吸血男の顔面をとらえました。本日何度目でしょうか、巨人のブーツをくらったのは、しかし、倒れることなく吸血男、足元のおぼつかない巨人の足をロッキクで攻めます」

バシッ！ バシッ！

「巨人も倒れなーい！ ここまでの意地と意地のぶつかりあい、見たことはありません。勝

利への執念がここまでさせているのでしょうか！」

バシッ！ バシッ！

「執拗にローキックを続ける吸血男」

バシッ！ バシッ！

バシッ！ バシッ！

「ああーと、ビックショー堪らず下がります。そこえ上段回し蹴りだ！

倒れるビックショー」

次こそ決める！

「トップロープをいつきにつけあがり、エアバンパイヤー！」

バン！

「決まったー！カバーに入ります。」

1、2、3

カンカンカンー！

「試合終了ー。吸血男、巨人ビックショーをもマットに沈めました。

これは本当に、将来が楽しみです」

吸血男の勢いは止まることを知らず難敵を薙ぎ払いスパースターの道を突き進む。

そして、プロレス界の頂点へまだまだ先は長い、これから吸血男の躍進が始まる。

おわり